複眼視点の意義

《複眼視点》

◆　複眼の語についてネット辞書類でみると，もともとは昆虫などがもつ眼で，小さな個眼が多数集合してできているものの呼称とされていますが，転じて，《複眼的に見る》は，対象をいろいろの見地から見ることのように使われているようです。別の表現では《多面的に捉える，多角的に分析する》なども，細かく詮議すれば違いもあることと思いますが，大きく捉えると，同様のことを指しているように思われます。

◆　できごとや事象を《複眼的に見る》ことの根幹的な大事さは，そもそも，全てのできごとや事象自体が，様々な要素・要因が繋がり重なり合って生じていることから考えると，まさに当然であり必須のことになると思われます。つまり，ものごとを捉えるこということ自体が，繋がりとして捉えるべきであることを意味しています。通常的な場面でも，原因や背景についての説明や分析が必要であったり，対応判断するのに影響や効果を見極めることが求められたりすることも，むしろ当然であり必須のことだと思われます。

◆　こうした捉え方は，府中高校で実践していました《ICEモデル》の第二段階の〔Connectionsつながり・活用〕の実際活用の動詞である〔比較・対比する　分類・識別する　統合する〕ことと同義であり，高校生までの学びを含めてそうした知的活動・思考回路ができるようになることが《深い学び》に繋がるものと思っています。

《複数視点の同存の意義》

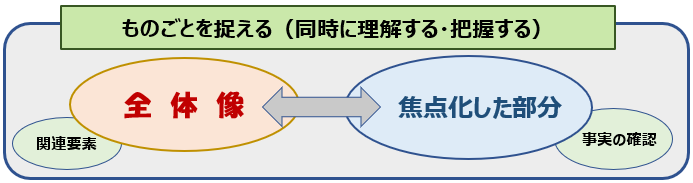
◆　ものごとを多面的・多角的に捉えたり分析したりすることは大事なことですが，日常業務において，時間を掛けて視点も確認しながらの多面的・多角的な捉え方や分析を試みる機会はそれほど多くはなくて，日常の通常の場面においては，2つから3つ程度の視点から捉えてみるくらいが一般的なのではなかろうかと思っています。反応的な対応の場面でも少なくとも複数の視点から複眼的に捉えることが大事で，その際，複数の視点としてはできるだけ《次元が異なる視点》がより有効になると思っています。複数視点の意義は相互に近いところの視点からでなく，まさに《対比的な異なる視点》になり得るくらいの違いが大事になると思っています。

◆　さらに大事なことは，《次元が異なる視点》を働かせるのは，できるだけ同時的な一連の流れの範囲で行うことだと思っています。理想的にはまさにほぼ同時に機能すればベストなのでしょうが，実際には難しい面があり，思考回路として一連の流れの範囲内で機能すれば充分だと思っています。

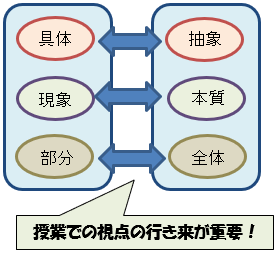
《対比的な異なる視点の事例》

◆　《次元が異なる視点》の有効性・意義については，このホームページの記事で幾つかの箇所で関連説明してきていますので，事例として紹介しておきます。

◆　次の図は，〔★こだわりメモ＞【2】課題に向き合う時に考えるべきこと〕の終わりに補足説明的に付けています。学校の通常の場面で生起するできごと・ものごとについては，きちんと多面的・多角的に視点を整理して分析することが必要なことも多くありますが，通常の案件については，まずこの2つの視点が大事になります。目の前の取り組んだり解決を図ったりする案件についての判断は，まずは「丁寧な事実の確認」を踏まえて，全体的な考え・根拠・方針・ルールなどとの考量を経て行うのが通常だと思いますし，こうした吟味はそもそも対応判断に必要なことだと思っています。



◆　右の図は，〔★授業の考え方・具体＞授業改善関連資料



（Ⅰ）＞〔６〕校内授業改善研修資料③「こんな授業を試み

たい」〕のところをはじめ　〔★カリ・マネの実際＞学びの構造〕

〔★こだわりメモ＞【13】大きく捉えてみる〕など複数の箇所で説

明に用いています。

◆　授業の組み立て・展開する側（教員）が，こうした《次元

が異なる視点》を意識したり事前準備しておくだけでなく，生徒

の学びの中にこうした《次元が異なる視点》を意識することを促す

演習シート設定や協議視点設定を入れ込むなど，ものごとの

捉え方・見方・考え方自体の中に《複眼視点》が身に付くような

学びを実践していただきたいと願っています。

◆　〔★〔管理職選考〕掲載記事＞第2回（令和元年10月28日）〕では「経営の全体図を把握する」という趣旨で，《鳥の目・虫の目・魚の目》を同時に働かせる意義を説明しています。もちろん，《鳥の目》は学校全体を高い視点・広い視野から捉えることであり，《虫の目》は具体や部分の中に含まれる意義や価値，人の気持ちなどを丁寧に捉えることであり，《魚の目》は時代の潮流や状況を的確に捉えることを意味しています。こうした視点は，管理職を目指す人だけでなく，授業・生徒の学びに関わる全ての教員にとっても必須のことだと思っています。

《目的・目標と手段・方法》

◆　《対比的な異なる視点》に類したものに〔目的と目標〕〔手段と方法〕〔目的と手段〕などの対比的な語があります。これらの対比語も　《次元が異なる視点》の要素を持っていますので同じように論じることも可能かと思いますが，私自身は，概念の違いとして整理しておくのが良いように思っています。語が意味するところが似通っていて，概念整理が弱いと混同して使われたりしていますが（実際に状況の変化により，それまで目的であったものが目標になったり手段になったりすることは普通にあることと思っています），具体事例・実際事例に照らして概念整理したり，図示したりしてみると，それほど難しい概念整理ではないように思っています。

《組織的な仕組みの中での複数視点の同存》

◆　組織は，通常，設置目的があり，役割を特定された人によって構成されていて，その構成の仕組み（役職や権限，システムやルールなど）がある集団と言われています。人の集団である以上，個人の考え方・価値観・意欲・能力などに違いがあるのが当然であり，自分が所属する組織の設置目的についてですら受けとめや具現化の意識・行動に大きな違いがあるのも，多くの場合「常識」といえることと思います。

◆　学校組織に属して教育活動に従事することは，眼前の授業をはじめとする業務を通常的な努力の範囲でこなすことができることが基本的・優先的に大事なことであり，そのことはややもすると，日々の忙しさも手伝ってその背景・背後にある仕組みやシステムなどの捉えにくい面があるものへの関心やアプローチが乏しくなることに繋がりやすい面があると思っています。個人的な関心力・対応力の違いによるものか，「日常生活的な慣れ・安定」が手伝うのか分かりませんが，そのバランスが悪い人に出うことがしばしばあります。学校組織に属している人には特に《複眼視点》を大事にしていただきたいと思っていて，私自身は次の捉え方を大事にしています。

小さな丁寧なことの中に宿る価値と，大きな仕組みや組織を維持し高めることの中に宿る価値は，共に共存的に大事であり，どちらかのみに偏ると，人の集まりとしての組織（社会）だけでなく個人も立ち行かなくなる。

　　（令和３年３月８日）